

できることから

2022. 1. 17

生徒の机の上にタブレットがあるのが当たり前になった。野田中学校はそうだが、野田小学校や他の学校に行っても、その光景は変わらない。あつという間とはこのことである。かなり短期間で変わったように感じる。生徒のスキル向上は予想されたことだが、先生方の意識の変化には、目を見張るものがある。

ある人の話である。教員はICTを含めて何でも全部理解してから子どもたちに使わせたいという思いが強い。教員の良心だとは思うが、ICT活用の操作スキルに関しては、子どもの習熟度の方が先である。子どもたちと一緒に学び、操作方法を教えてもらいながら上手に使うくらいでよい。授業が始まり、必要なときに保管庫から引っ張り出してくるのではなく、学校に来たら端末を机の上に置くか、引き出しの中に入れてすぐ使えるような環境にする。そこから始めてみるべきである。

またある人は、こう言う。授業で端末を活用し始めれば、当初は操作を確認しながら時間をかける必要が出てくる。授業のペースは落ちるが、子どもとルールを作り、こういうときに、こういうふうに使おうと確認する。端末が文具化するまでは少しの我慢が必要である。1、2か月はかかるかもしれない。

子どもが慣れれば、スピードは一気に変わる。本校でその様子を見た。次の段階は、任せて待つという姿勢だろうか。これが難しい。子ども同士が教え合って、自分たちで解決する。任せて待って、うまくいったら褒める。

イメージとしては、「いつでもちょこっと使う」だろうか。使えば使うほど、課題はどんどん出てくる。何せみんなが初めての経験である。これまでとは違う。みんな環境をつくっていこうというスタンスが求められる。

日本人は、よほどのことがないと変わらないと言われてきた。それが、瞬く間に学校に新しい文房具としてタブレット型端末が入ってきた。整備される前は、ああでもないこうでもない、始まる前から心配の声が聞かれた。こういったことはよくある。大騒ぎしたわりには、意外とうまくいく現象である。

これだけ短期間で変わったということは、よほどのことがあったのである。それがコロナ禍である。それだけすごいことなのであろう。残念ながら、この状況はまだまだ収束へとは向かわない。そうであるならば、さらにICT化を進めて、完全に子どもたちが端末を使いこなすレベルまでもっていければと思う。そうなれば、先生方の操作スキルも格段に上がっていくはずである。できることから、子どもたちと一緒にやっていく。これからもこの考え方でいきたい。